

教育実践報告

特別支援学校教員養成課程における「障害児臨床支援演習」の 取り組みについて

—特別支援学校との連携授業の実践—

小林 敏枝・関 昌浩

An Approach Toward Clinical Exercise in Course of Special Needs Education in University:
A Practice of Collaborative Classes with Teachers in Special Needs Education School

KOBAYASHI Toshie and SEKI Masahiro

要 旨

近年、特別支援学校教員における高度な専門性と高い人間力が求められている^{注1}中で、特別支援学校教員養成の在り方について検討することは教員養成全体に関わる重要事項である。大学入学までに特別支援学校訪問などの経験のない学生が80%以上(本学1年生の調査による)という実態を踏まえて、特別支援学校教員養成において学生が何を学びどのような知識・技術を身に付けるべきか検討することは重要である。特に演習系科目の役割は大きい。今回は、臨床演習系科目のプログラムとして、特別支援学校と連携したプログラムを実施したので、実践内容とその成果について報告する。

キーワード

特別支援教育 教員養成 肢体不自由 臨床演習 特別支援学校との連携

目 次

- I. はじめに
- II. 「障害児臨床支援演習Ⅱ」(肢体不自由)の取り組み
- III. 特別支援学校教員養成課程における臨床演習の意義
- IV. 松本大学教育学部における特別支援学校教員養成の課題

注

文献

I. はじめに

松本大学教育学部が開学して5年目となる。昨年度、完成年度を迎え、第1期生を教育の現場に送り出した。本学では特別支援学校教諭1種免許状が副免許として取得可能である。小学校教諭1種免許状取得を基礎免許として、2年生の後期に30名の定員で副免許の募集を行っている。

本学教育学部では、「子どもを理解し信頼される教育の専門家」を目指して「理論と実践が融合した実践教育で真の実力を高める」ことを目標としている(松本大学案内より)。1年次は「学校ボランティア活動」、2年次「学校インターンシップI(小学校)」、3年次「初等教育実習・学校インターンシップII(中学校)」、4年次「中等教育実習・特別支援学校教育実習」と、子ども・現場との関わりを積み重ねステップアップして教員としての資質を養う方式を取っている。また、地域に貢献できる教育のプロフェッショナルの育成に力を注ぎ、主に地域連携では様々なプログラムを実施している。長野県においては、私立大学初の教育学部として、地域に貢献できる教育のプロフェッショナルの育成を目標としている。

本学の特別支援教育に関するカリキュラムは以下に示す通りである。(2019年度入学生対象)

- 1年次 「特別支援教育入門」(教職に関する科目)
- 2年次 「特別支援教育総論」
「障害児臨床支援演習I」
- 3年次 「知的障害児の教育課程と指導法」
「肢体不自由児の教育課程と指導法」
「知的障害児の心理・生理・病理」
「病弱児の教育課程と指導法」
「肢体不自由児の心理・生理・病理」
「病弱児の心理・生理・病理」
「発達障害児・者の支援と教育」
「障害児臨床支援演習II」
「視覚障害児教育総論」
「聴覚障害児教育総論」
「特別支援学校教育実習事前指導」
- 4年次 「特別支援学校教育実習」

このカリキュラムの中で臨床演習系の科目は限られているが、理論と実践をつなぐ重要な科目であると考えている。

1年次に学生の特別支援学校訪問・見学の体験に

ついて調査したところ、「体験がある学生：17%」「体験のない学生：83%」であった。(2021年度入学生93名対象の調査)今回の授業実践報告の対象の学生(障害児臨床支援演習II受講生31名)においても、特別支援学校訪問等の経験なしは86%、ありは14%であった。障害のある子どもとの関わりでの体験がほとんどないと回答した学生がたいへん多い。特別支援学校を訪問した経験もなく、特別支援教育を学ぶ上で子どもの姿や障害をイメージすることが難しいことが予測される。このような現状を踏まえて、大学4年間での特別支援学校の教員養成に必要な要素を見極め、人材育成プログラムを構築することが重要である。

柴垣ら¹⁾は、大学における教員養成に求められているものとしては、「特別支援学校教員の場合は、入職段階から障害のある子どもたちの指導や支援がスムーズに行えるような様々な知識や技術、資質等を身につけていることが必要であり、大学においてどのような養成を行っていくかは大学教育そのものの在り方も含めて検討していく必要がある」と述べている。「特別支援学校教員の資質能力の向上に関して、『特別支援学校教員においても専門職としての高度な知識と高い人間力を身につけることが求められていること。』さらに『教育委員会と大学との連携・協働による養成・研修など具体的な専門性の向上方策の策定が求められていること。』」などが示されている¹⁾。

本学においても、特別支援教育に関わる人材育成について、大学全体として取り組んでいくことが重要であり、臨床演習系のカリキュラムの在り方について今後検討を重ねていく必要がある。障害のある子どもとの関わりを通じて、理論と実践を融合し、4年次の特別支援学校教育実習に向けて、障害の理解を深め実践スキルを育成し意欲を高めることが重要である。

今回は特別支援学校教員と連携して「障害児臨床支援演習(肢体不自由)」の授業を実施したので、その内容と成果、また学生の評価・学びなどについて報告する。

Ⅱ. 「障害児臨床支援演習Ⅱ」(肢体不自由)の取り組み

1. 授業の目的および内容

特別支援教育に関する科目群の中の3年次に履修する「障害児臨床支援演習Ⅱ(肢体不自由)」は「肢体不自由児の特別支援教育と関連領域の現場の見学を通して、肢体不自由児教育に求められる「一人一人のニーズを見極めてそれに対応する力」を身につけること。さらに、広い視野から障害児支援の在り方を捉え、今後の専門学習や教育実習に向けた心構えと自身の学習課題を明確にする」ことを目標としている。特別支援学校を訪問し「授業参観・支援体験」を実施する。またその後リフレクションを行い、発表・ディスカッションを通じて、肢体不自由の子どもへの理解を深め、支援方法などについて学ぶ科目である。特別支援学校との連携と現場の先生方の協力が必要であり、専門性の向上をねらいとしている。

そこで、今年度より、特別支援学校の教員と大学教員が連携して授業を担当した。より具体的な子どもの姿や授業の様子などについて学生が学ぶ実践教育の機会とした。また、特別支援学校訪問についても現場の教員にコーディネイトを依頼し、各クラスの担任の先生方の協力を得ることができた。大学教員と特別支援学校の教員の複数担当による「障害児臨床支援演習Ⅱ」(肢体不自由)の授業の取り組みの実際とその成果について報告する。

臨床支援演習として、当初の予定では特別支援学校訪問を合計4回計画していた。しかし、コロナ禍の影響で、前半の授業がオンラインとなったことにより当初の計画を変更した。変更後の授業内容を表1に示す。

2. 学生の受け止めと学び ～学生へのアンケート結果から～

表1のような内容で実施した授業を学生がどのよ

表1 2021年度 障害児臨床支援演習Ⅱ (肢体不自由)授業計画

1	授業の目標・進め方 学外授業の意義・目標・進め方	
2	ライフステージを通じた肢体不自由児支援の在り方	
3	特別支援学校卒業後の生活 キャリア教育 (特別支援学校⇄社会へ)	
4	肢体不自由のある子どもの教育 (教育課程 自立活動等)	
5	特別支援学校(肢体不自由)について (視聴覚教材)	(特別支援学校教員)
6	肢体不自由児のアシスト(自立活動の実際・コミュニケーション手段の選択と活用、状況に応じたコミュニケーションの実際など)(視聴覚教材)	(特別支援学校教員)
7	肢体不自由児教育の教材の実際と授業の展開 (視聴覚教材)	(特別支援学校教員)
8	特別支援学校(肢体不自由)訪問事前学習	
9	特別支援学校訪問 (1)	(特別支援学校教員)
10	特別支援学校訪問 (2)	(特別支援学校教員)
11	教材開発 発表(1)	(特別支援学校教員)
12	教材開発 発表(2)	
13	教材開発 発表(3)	(特別支援学校教員)
14	特別支援学校訪問のリフレクション・発表・ディスカッション	
15	肢体不自由児教育のまとめ	

*「教材開発の課題」①どのような子どもを想定しているか②どのような場面、どのようなねらいで実施する活動を想定しているか③教材の解説④教材の特徴・工夫した点・良い点・課題

うに受け止めたか、またどのようなことを学び、実習などへの動機づけにつながったか等について、アンケート調査を実施した。

1)調査内容

- ①特別支援学校訪問が役に立ったと思うか。(「とても役に立った」から「全く役に立たなかった」の5段階で回答を求めた)
- ②演習の授業で学んだ内容で今後役に立つと思う内容について(各項目について「とても役に立った」から「全く役に立たなかった」の5段階で回答を求めた)
 - ・特別支援学校訪問支援体験
 - ・体験後のグループ発表・情報共有
 - ・教材開発・発表 ・教材集の作成
 - ・身体の学習
 - ・肢体不自由児の教育課程、自立活動
 - ・コミュニケーション手段の選択と活用
 - ・子どもの授業の様子や活動の動画 等
- ③障害児臨床支援演習Ⅱの受講前と後で変化したことについて(各項目について「とても高くなった」から「全く高くならなかった」の5段階で回答を求めた。)
 - ・特別支援教育への関心度 ・特別支援学校教育実習への動機づけ ・今後の学習への意欲
 - ・肢体不自由児への理解 ・特別支援学校のイメージの変化、特別支援教育の大変さ 等
- ④特別支援学校訪問で学んだ事(自由記述で回答)

2)学生へのアンケート結果

- ①特別支援学校訪問は今後の学習に役に立ったか
結果図1のとおり。
- ②学習内容が今後の学習や動機づけに役だったか
結果図2のとおり。
- ③授業の受講前と後で変化したこと
結果図3のとおり。
- ④自由記述から
「現場の先生の講義や実習を受講できたことは大変有意義であった」とう意見がほとんどであった。「どのような点がよかったのか」の記述では、
 - ・教材づくりの発表では、実際に子どもの事例をあげてアドバイスがあった。
 - ・コロナが流行したことで実際の生活はどのように変化したのか学べた。
 - ・体験型の内容も豊富で、実態の理解や現場での実践を多く学ぶことができた。
 - ・大学での講義に加えて、現場での現状や支援方法を学ぶことができて質の高い学習ができた
 - ・大学の先生の講義はもちろん、現場の先生の授業の様子や実践は貴重で有意義であった。
 - ・大学で学んだことが具体的な理解につながり有意義であった。
 - ・自分で考えた教材について、大学の教員と現場の先生からアドバイスがありこの体制で授業を受講できたことは今後の学習意欲につながった。
 - ・後輩たちにもぜひ体験してほしいと感じた。

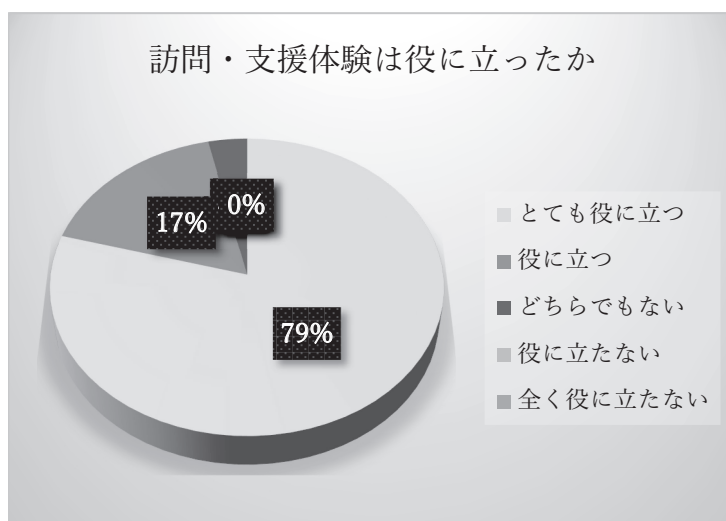


図1. 特別支援学校訪問・支援体験は今後の学習に役に立ったか

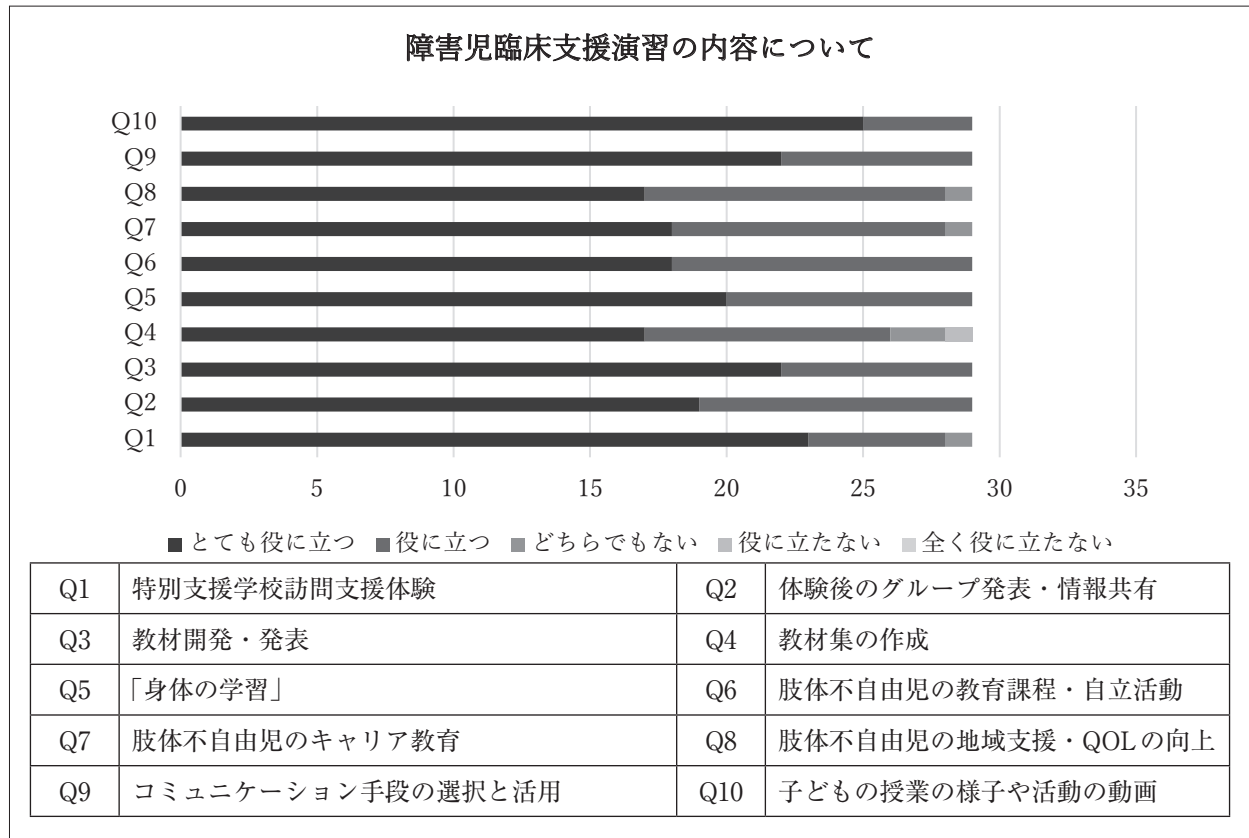


図2. 障害児臨床支援演習の内容が今後の学習や動機づけに役に立ったか

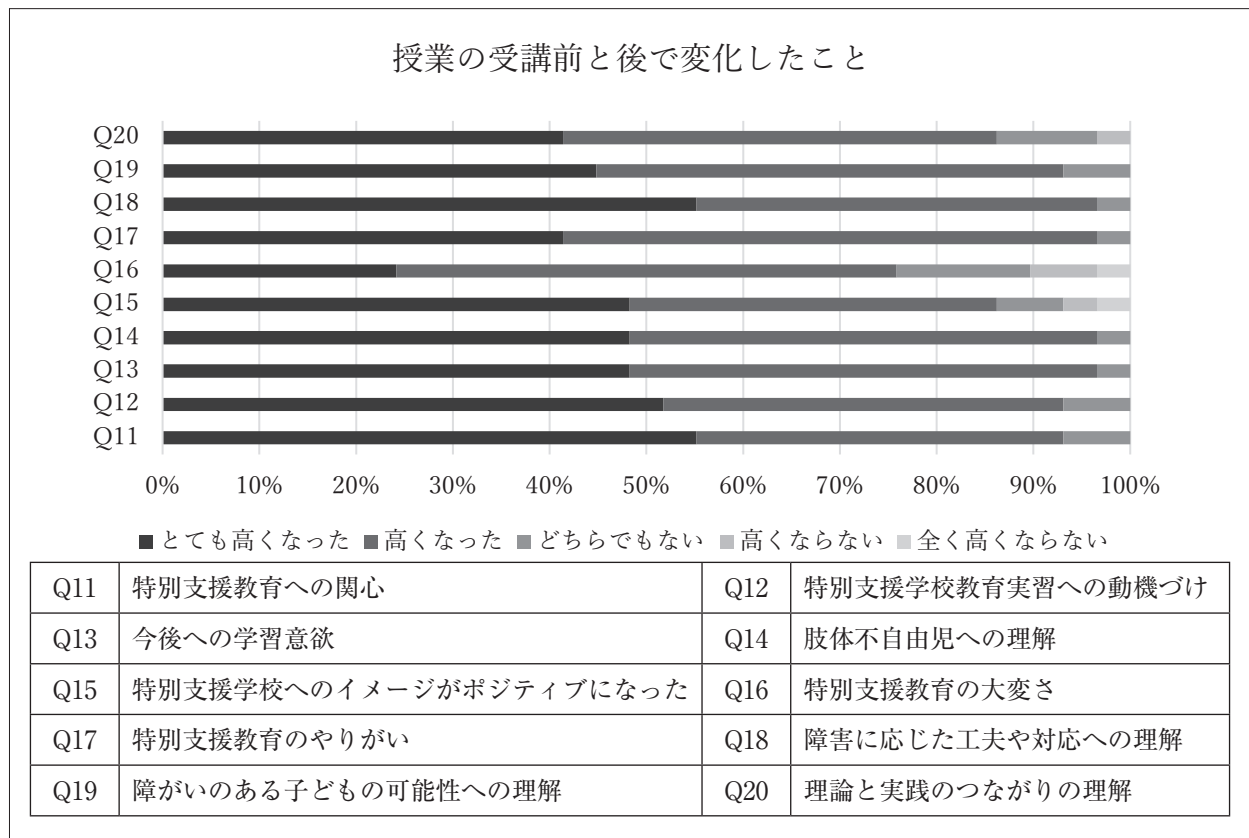


図3. 授業の受講前と後で変化したこと

以上のように、理論と実践がより具体的に学ぶことで、理解が深まり学習意欲につながったという記述が多くみられた。

3) アンケート結果からの考察

上記の結果から、学生の受け止めは次のように集約できる。

「大変役に立った」という回答の多い順では、① 肢体不自由児の様子や授業の動画を見ながらの解説、② 特別支援学校訪問・支援体験、③ 肢体不自由児とのコミュニケーション方法とその工夫に関して実際に学べたこと、④ 実際に肢体不自由児を想定して教材開発を行い発表・コメントと、より深く学べたこと。

また、「受講前と後で変化したこと」の回答で理解や意欲・関心が「とても高くなった」と「高くなっ

た」を合わせた回答はどの項目も90%以上であったが、「とても高くなった」との回答の多かった項目は、① 障害に応じた対応や工夫の理解、② 特別支援教育への関心、③ 今後の学習への動機づけ、であった。

また、自由記述の中では、「理論と実践がつながり具体的な理解が深まった」「理論に現場の先生の実践が加わり貴重な講義であった」などの意見も多数あり、「後輩に勧めたい授業」との記述がみられた。

Ⅲ. 特別支援学校教員養成課程における臨床演習の意義

特別支援学校教員の専門性については、様々な議論がある。地域の実情、学生の実態などを踏まえて、



図4. 特別支援学校での体験
相手の気持ちになって考えよう



図5. 特別支援学校での体育授業に参加
子どもにボッチャのボールを渡す学生



図6. 身体の学習
動作法について体験する学生



図7. 教材の発表
自分で考えた教材についての発表会

どのような専門的な力を育むことが重要なのか。子どもの発達・QOLの向上を中心に置いた時に、その目的のために必要な教員の力量を構造化することが重要である。

澤田ら²⁾(2013年)は、「障害のある子どもの指導に関する専門性」として、「障害の特性の理解と指導」「子どもの実態把握とアセスメント」「個別の指導計画の作成」「学級づくり・授業づくり」などを挙げている。太田³⁾(2004年)は、特別支援学校教員の専門性は、「授業をする」「授業をつくるあるいは改善する」という授業を作っていく力であると述べている。授業をつくるためには、障害の理解(発達・心理・生理・病理など)教育課程や指導法の理解および実践力などが挙げられている。

今回は特に臨床演習の授業の取り組みについて報告し、特別支援学校の教員と大学の教員が連携して授業を行うことのメリット、授業内容、その成果などについてまとめた。

その結果、授業内容として理論と実践を結び付けた授業展開が可能となったことが推察される。アンケート結果からも、学生にとっても有意義であったことが窺える。また、特別支援学校の訪問・支援体

験については、特別支援学校教員がコーディネートしたことで、特別支援学校全体の協力が得られ、クラスに配属された学生の体験・学びがより深いものになった。各クラスの担任の先生方の授業の解説や子どもの様子など、目の前にいる子どもと共に学習できたことの成果は大きい。教材の開発においても、実際に子どもが教材を使っている様子と共に、そのねらいや障害との関係を理解しながら考えることができた。実際の子どものイメージして教材開発ができたことは、やはり現場の先生の関わりが大きいと考える。ゲストスピーカーとは違い、学生が課題をみつけ、解決に向けて調べ・考え、アドバイスを受けて学びを深めるプロセスにおいて関わりが持てたことは有意義であったと思われる。教育課程や自立活動の理論、またキャリア教育や地域における肢体不自由児の支援、生涯を通じてのQOLの向上など。そして障害のある子どもの発達やアセスメントについてなど基本的な理論は大学の教員が担当する。座学で学んだこれらの知識と実際の場面での子どもの姿と結びつけ、指導の在り方やコミュニケーションの方法など、具体的な理解を深めていく展開は学生にとって「わかる授業」であったと思われる。その

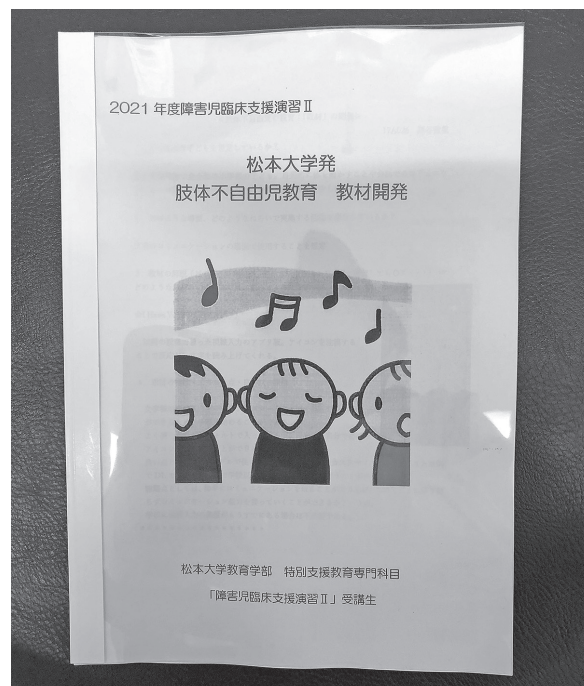


図8. 松本大学発
「肢体不自由児教育 教材開発」
(障害児臨床支援演習Ⅱ受講生)

中で、子どもの可能性や豊かな人生について考え、切れ目のない支援の重要性を学ぶ授業となった。特別支援学校の教員と大学の教員が連携して実践した取り組みは大いに効果があったと推察される。特別支援学校教員との連携を密にして、学生がどのような体験をしてどのような力をつけていくのかを明確にし、学生の行動や意識の変容を確認しながら進めることの重要性が明らかになった。

IV. 松本大学教育学部における特別支援学校教員養成の課題

入学時の調査によると、特別支援学校訪問などの経験がない学生がほとんどであった。特に肢体不自由児との活動経験は少ない。そのような実態の学生が特別支援学校教諭の免許を取得する場合、4年間でどのような取り組みが必要なのか。特別支援学校教員の資質・能力、求められる人材について、特別支援学校や教育委員会などと連携して、質の高い教員養成プログラムを構築することが重要である。

そのためには、今回の授業の取り組みから発展して、臨床経験をさらに進めていく取り組みが必要である。今後は、年間通じて学生が障害のある子どもと共に活動する機会を企画し、活動を通じて障害の理解や適切な対応、コミュニケーション、アセスメントの実際などを学び、特別支援教育への意欲向上・やりがいなど、人間力向上につながることを期待したい。本学には現在、障害児の支援活動を体験するプログラムが存在しない。特別支援学校でのボランティアなどは経験できるが、今後は臨床実習の支援活動として位置づけた企画を検討することが必要である。学校・地域・福祉・医療・大学などの連携のもと、一人の障がいのある子どもの育ちの支援を立体的に体験できるプログラムなどである。

例えば、放課後等デイサービスと連携した障がいのある子どもの放課後や長期休業中の活動の支援プログラムの企画などである。学生はユニットを組んで子どもと年間通じて関わり、学生が企画した活動を提供する。子どもの活動の様子や変化などを記録すると同時に、また学生自身の振り返りも記録する。子どもとの関係性や関わりの受け止めの変化やその体験自体が学生自身の学びになっていること、意欲の向上に貢献していることを実感することは次の学

びへの動機づけになる。また、定期的に保護者との懇談会を開催し、親の願いや家庭での様子を聞く機会を設け、保護者と信頼関係を築き共に子どもの成長を願う思いを共有する。さらに特別支援学校とも連携し、学校で立てる個別的教育計画と放課後等デイサービス(事業所)で立てる個別支援計画がつながり響き合えば発達支援に良い効果が生まれる。地域の中で障がいのある子どもが育つということ、多職種との連携の大切さを実感できるようなプログラムを作り上げることも今後の課題として検討していきたい。

障害のある幼児児童生徒を受け入れる幼・小・中・高等学校の教員の専門性として、尾崎は次のような内容をあげている³²⁾。

- ①障害を理解していること(障がいの基礎知識、アセスメントの検査技術)
- ②障害の特性に応じたコミュニケーション手段を獲得していること
- ③障害の関わる教育に関する教育課程を熟知していること
- ④幼児児童生徒の障害の状態に合わせた指導内容・方法を計画(個別の指導計画・個別的教育支援計画の作成と活用)し実践できること
- ⑤教材・教具の作成、活用(情報機器も含む)ができること
- ⑥障害の状態に合わせた職業教育。キャリア教育や進路指導と就労支援ができること

これらの専門性向上方策として、現職研修の重要性と共に、大学における教員養成段階からの問題としての検討の必要性も述べている。

特別支援教育に関わる人材育成に求められる専門性・資質は大変多岐にわたっている。はたして4年間で身につけられるかという疑問もある。しかし、特別支援学校教員養成に携わっている大学として、現段階で本当に必要な基礎力を明確にし、柴垣¹⁾が述べているように、特別支援学校教員に必要な資質を身につけるために何をどの程度まで身につけておくことが必要なのか、大学における養成の在り方を含めて検討を進めていくことが重要である。

他大学の取り組みを参考にしながら⁴⁶⁾、地域の特性やニーズに適したプログラムを企画・計画して実施できるように検討していきたい。

謝辞

今回の調査にあたり、ご協力をいただきました花田養護学校(肢体不自由)の先生方に心より感謝申し上げます。

注

- 注1 文部科学省, 「特別支援教育を充実させるための教職員の専門性向上等」(mext.go.jp)
https://www.mext.go.jp/b_memu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325892.hwt
 (2021.8.10)
- 注2 文部科学省, 「中央教育審議会初等中等教育分科会特別支援教育の在り方に関する特別委員会第4回討議資料」2010
https://www.mext.go.jp/b_memu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1298243.htm
 (2021.8.10)

文献

- 1) 柴垣登, 「特別支援学校教員の専門性向上のための諸課題についての考察」『立命館大学教職研究』4, pp.11-21(2017).
- 2) 澤田真弓研究代表, 「インクルーシブ教育システムにおける教育の専門性と研修カリキュラムの開発に関する研究」『独立行政法人国立特別支援教育総合研究所専門研究A研究成果報告書』(2013).
- 3) 太田正巳, 「特別支援教育のための授業力を高める方法」黎明書房(2004)pp.38-39.
- 4) 飯塚一裕・青柳まゆみ・小田侯朗・岩田吉夫他, 「HATOプロジェクト構成大学における特別支援学校教員養成カリキュラムの現状と課題」『障害者教育・福祉学研究』第12 pp.185-191(2016.3).
- 5) 小田浩伸, 「特別支援教育の理論と実践をつなぐアクティブ・ラーニングによる授業実践—特別支援教育指導法演習「きりり教室」の取り組み—」『大阪大谷大学特別支援教育実践研究センター紀要』2 pp.47-58(2018).
- 6) 小島哲也・宮地弘一郎・白神晃子, 「信州大学における特別支援教育臨床実習の新たな取り組み—地域企業と連携した学校農園プロジェクト—」『松本大学研究紀要』16 pp.135-141(2018).